

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：33808

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12940

研究課題名（和文）デンマーク黄金時代におけるキルケゴールのヘーゲルに対する関係

研究課題名（英文）Kierkegaard's philosophical relations to Hegel in the Danish Golden Age

研究代表者

大坪 哲也 (Otsubo, Tetsuya)

静岡英和学院大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：50826998

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、セーレン・キルケゴールの思想をデンマーク黄金時代の哲学、宗教、文化の文脈において捉え直し、とりわけデンマークヘーゲル主義の文脈を焦点に、キルケゴールとヘーゲルの影響関係を明らかにするプロジェクトである。これまで研究史においてほとんど知られてこなかった、デンマーク黄金時代の哲学や神学の文脈を明らかにし、キルケゴールがヘーゲル哲学を受容した思想的背景から、ヘーゲル哲学との影響関係が全面的に問い直された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

筆者はコペンハーゲン大学のキルケゴールリサーチセンターで研究して以来、膨大な文献調査を実施してきた。「デンマーク黄金時代」の研究は、現在、キルケゴールの再評価とともに英米圏やラテンアメリカ、アジアなど国際的な広がりを見せている。我が国で本格的にこの分野に取り組む研究者がいないため、本研究は、デンマーク黄金時代研究の端緒を開くとともに、キルケゴール研究の大胆な刷新が期待される。本研究の学術的意義としては、キルケゴール研究に留まらず、ヘーゲル哲学の新たな影響史研究にも寄与し、さらにデンマークとの文化交流にも寄与すると期待される。

研究成果の概要（英文）：This project rethinks the ideological influence between Kierkegaard and Hegel in the context of the Danish Golden Age.

The unique contribution of this thesis places Kierkegaard's early thought within the context of the reception of Hegelian philosophy in nineteenth-century Denmark.

With this academic originality, this dissertation is expected to contribute not only to Kierkegaard studies but also to new historical studies on Hegelian philosophy and new developments in Danish philosophical studies.

研究分野：哲学 神学 思想史

キーワード：デンマーク黄金時代 キルケゴール ヘーゲル

1. 研究開始当初の背景

著者は、2010年から2012年にコペンハーゲン大学キルケゴール研究センターに勤務したが、最近の研究動向や現地でのさらなる文献調査を必要としていた。助成金が採択されることにより、国際学会に出席し、現地での文献調査をするなど研究プロジェクトを遂行する条件が整えられた。

2. 研究の目的

本研究は、コペンハーゲン大学に入学した一八三〇年から『あれかこれか』を刊行する一八四三年二月までの青年キルケゴールの思想形成を、ヘーゲル哲学及びデンマークヘーゲル主義との影響関係を重視し、デンマークのヘーゲル主義的思想家としての初期のキルケゴール像を明らかにする。

3. 研究の方法

研究の方法として、キルケゴールとヘーゲルの思想的関係を文献学的に比較する歴史研究から、影響作用史研究に転換する。これによって、キルケゴールがデンマークでヘーゲル哲学を受容した背景が新たに解明され、デンマークヘーゲル主義の文脈で、キルケゴールがヘーゲル哲学を受容し、批判した文脈が明らかにされる。

4. 研究成果

本研究の主題に入るための準備作業としてデンマーク黄金時代におけるヘーゲル哲学の影響史を紹介する。プロジェクトでは、キルケゴールのヘーゲル理解の前提として、J. L. ハイベア、H. L. マーテンセン、A. P. アドラー、F. C. シバーン、P. M. メラーといった主要人物たちのヘーゲル哲学との関係が明らかにされた。

最初期の作品も、デンマークヘーゲル主義との影響関係から考察され、この時期のキルケゴールがハイベアサークルの影響下にあったことが明らかにされた。ハイベアのエーレンスレイヤー批評の考察では、詩的ジャンル論やイロニーの統制的機能の問題を分析することで、キルケゴールの初期の関心が美学にあり、初期思想への影響が明らかにされた。

処女作『今なお生ける者の手記』も、上記で述べたように、ハイベアサークルとの関係において分析される。作品の冒頭でヘーゲルの論理学が「不朽の名著」と言及されるように、初期のキルケゴールがヘーゲル論理学を肯定的に受容した経緯が分析される。また長編作家としてのアンデルセンへの批判が、ハイベアの『ミクラゴアのヴァラング人』の批判が与えた影響から明らかにされる。以上の考察から浮かび上がるのは、初期のキルケゴールが、ハイベアサークルの一員として、デンマークのヘーゲル受容の観点から、積極的にヘーゲル哲学を学んだことである。この限りで初期のキルケゴールは、デンマークのヘーゲル主義者のひとりに数えられる。

マーテンセンとの関係についても、ヘーゲル哲学との複雑な関係を解きほぐしながら、初期のキルケゴールに与えた影響について明らかにされた。マーテンセンをヘーゲルの単なるエピゴーネンと見做していたとする従来の研究史を見直し、マーテンセンの自伝に書かれたキルケゴールに関する記述を頼りに青年時代の両者の影響関係に注目した。マーテンセンからシュライアマハーの神学について学び、留学後に発表されたヘーゲルに関する諸論文を注意深く読むなど、初期のキルケゴールの思想形成には肯定的な側面が見られる。遺稿『ヨハネス・クリマクス』から浮かび上がるのは、青年時代のキルケゴールがマーテンセンの著作からデカルトの方法的懐疑を学び、ヘーゲルに至る近代哲学の発展を、自律の体系として理解した点である。このようなヘーゲル理解はマーテンセンを介さなければ到達することのできない独自の線である。キルケゴールはヘーゲルの著作を直接研究する前に、マーテンセンのヘーゲル理解に影響を受けたのであり、神律神学の立場からヘーゲルを批判する点も視野に入れていた。ヘーゲル哲学の理解が深まると、キルケゴールは次第にマーテンセン神学を批判するようになり、批判の標的はヘーゲルではなくマーテンセンに絞られていく。

以上の観点から、キルケゴールにとってマーテンセンの思想及び彼のヘーゲル理解は、ヘーゲルからの直接的な影響に先行しており、神律神学によるヘーゲル批判をフランツ・バーダーの思弁神学に由来すると見ていることから、マーテンセンを単なるヘーゲルのエピゴーネンとは見ていないことは明らかである。両者の影響関係を正しく評価するためには、マーテンセンのヘー

ーゲル理解とヘーゲル批判が初期のキルケゴールに与えた影響を同時に見定めなければならず、マーテンセンの初期思想が確立していく道筋に従って、初期のキルケゴールのマーテンセン理解を評価しなければならない。以上の考察を刊行予定である『キルケゴールとヘーゲル』に加えたところで、最終年度の研究は終了した。

学位論文『イロニーの概念』についても、ヘーゲルとの影響関係を全面的にみなおすことができた。従来『イロニーの概念』は、トゥルストルブを始めとする多くの研究者によって、ヘーゲルへの皮肉を込めた批判の書と見なされてきた。それに対して、この研究では、学位論文のソクラテス解釈がヘーゲルの著作に多くを負い、ヘーゲルからの影響を否定することができないことを、さまざまな観点から論証した。そこで明らかとなるのは、『イロニーの概念』が、ヘーゲルの文献を縦横に参照し、ヘーゲルとの不一致や批判的言及を含むものの、ヘーゲルの解釈によって可能になったソクラテス理解をヘーゲル自身よりもさらに徹底しようとした、ということであった。その意味で、この学位論文でのヘーゲルに対する関係は、全体として肯定的なものであり、初期のキルケゴールにヘーゲル哲学そのものに対する批判的な意図を読み取ることはできない。

それではこの学位論文は、ヘーゲル的な思考の影響下でソクラテス理解を提示しただけの、あまり価値のない作品なのだろうか。そうではない。本論文はこの学位論文の真価を明らかにするために、ヘーゲルの解釈に対してキルケゴールのソクラテス解釈が優れている点を明らかにした。その優れた点とは、イロニーが本来、ソクラテスの生に関連付けられた個別的で内面的な規定であり、ヘーゲルの歴史哲学が看過した主体性の規定としてのイロニーのあり方が洞察されたことである。実際、キルケゴールは、雲のように把握し難いと評されたソクラテスについての理解が、ヘーゲルによって可能になり、現実化され、必然的なものになる過程を詳細に分析しながらも、ソクラテスの人格性とイロニーとの結びつきに踏み込む段になると、常にヘーゲルの見解を批判的に修正したのである。

以上のことから『イロニーの概念』は、ヘーゲル批判の書ではなく、ヘーゲルの歴史哲学的観点とデンマークのヘーゲル主義の影響によって書かれた極めてヘーゲル主義的な作品であると結論付けたのである。

『あれかこれか』におけるヘーゲル哲学の問題も、デンマークヘーゲル主義の影響を介して考察された。まず『あれかこれか』のタイトルの意味を明らかにすることで、同時期に起こった、デンマーク矛盾論争の影響範囲が確定された。そこで明らかにされたのは、確かにキルケゴールは『あれかこれか』のタイトルからデンマーク矛盾論争のスローガンを意図的に指示したが、このタイトルの意味は、一面的にヘーゲル批判に加担するものではない、ということであった。すなわちキルケゴールは、序文でAの美的人生観とBの倫理的人生観を提示する際に、Aの著者に対してBの倫理的選択を絶対的な二者択一として突きつけたのではなく、「あれかこれか」の選択がそのどちらを選べばよいのか、あらかじめ結論に達していないと説明したのであった。このような理解は、「ディアプサルマータ」のタウトロジーに関する見解からも導かれる。

すなわち矛盾論争で議論された最高の思惟原則としての同一律の意味について、キルケゴールは、ヘーゲルを批判する見解と、ヘーゲル主義の見解を併存させたのである。それによって、矛盾律の原則が有効性を持つ経験的な意味での「あれかこれか」と、思弁的媒介の領域での第三項による総合の立場が区別された。この立場は倫理的著作のなかでも維持された。『美と倫理の均衡』では、ハイペアの排中律の妥当性に関する議論から思弁と自由の領域が区別されたのである。そこではヘーゲル哲学が歴史を調停する意味と歴史に対する個人の決断の意義が区別され、最終的には、「歴史的な運動の総体から、主体の決断も必然性の支配を受けなければならない」という、ヘーゲルの歴史哲学的立場が維持されたのである。

以上のように、本研究では、デンマークヘーゲル主義からの影響作用史という視点を導入することによって、初期のキルケゴールとヘーゲル哲学との関係を全面的に見直すことができた。以上の事から導かれる初期思想の重要な特質として、最後に次の三点を指摘しておこう。第一には、キルケゴールのヘーゲル受容がハイペアのヘーゲル主義を経由して進められ、それによってデンマーク黄金時代の文化的諸問題と結びついていたことである。キルケゴールはその時代の文化的課題に应答する所から思索を始めたのであり、その意味で文化の哲学者であった。第二には、初期のキルケゴールにとって、美学や論理学などのデンマークの諸論争は、ヘーゲル主義の立場から回答すべきものだったということである。この点において、初期のキルケゴールはデンマークヘーゲル主義者の一人に数えられる。第三には、初期と同じ仕方ではないにせよ、中期以降の実存思想もまた、ハイペアやアドラーなどのデンマークヘーゲル主義との影響関係によって形成されたことである。

本研究のキルケゴール研究への独自の貢献は、影響史的考察という手法を取ることによって、十九世紀デンマークにおけるヘーゲル哲学の受容状況の中にキルケゴールの初期思想を位置付けたことにある。このような学術的独自性により、本研究は、キルケゴール研究に留まらず、ヘーゲル哲学の新たな影響史研究にも寄与し、さらには日本におけるデンマーク哲学研究の新たな発展に貢献すると期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------